

聖書：マタイの福音書 28章1～15節

説教題：主はよみがえられた

### 1 当時流布していたうわさ

15節に、「この話が広くユダヤ人の間に広まって今日に及んでいる」とあります。マタイの福音書は、イエスが十字架で処刑されてから三十年後、あるいは五十年後に書かれたと考えられています。長い時間が経っても、イエスが葬られていた墓のことを人々がうわさをしていました。イエスのなきがらが忽然と消え去ったことを、当時の人々も事実として受けとめていたことがわかります。

問題は、ではどうして消えたのかです。イエスが死者の中からよみがえられたのだと言っても、多くの人は鼻で笑うでしょう。それよりも、弟子たちが夜こっそりとイエスのなきがらを持ち去ったに違いないというほうがまだ本当らしく聞こえます。

日曜日の朝、よみがえられたイエスを目撃したふたりのマリヤはこのあと何度も繰り返してイエスがよみがえられたことを証言していったでしょう。でもふたりの証言を信じる者はあまり多くはありません。弟子たちでさえ最初は疑いました。あまりにも常識から外れた話です。しかし聖書は、このことは事実として起こったのだと堂々と主張します。私たちはどう考えたらよいのでしょうか。

パウロは、「もしキリストがよみがえらなかつたのなら、あなたがたの信仰はむなしく、あなたがたは今もなお、自分の罪の中にいるのです」(第一コリント 15章 17節)と言っています。キリストがよみがえられたことは、私たちの信仰の根幹に関わる出来事

です。今朝は、イースターを覚えてこのことを見ていきます。

### 2 安息日の朝

9節のみことばに目を留めていきます。「するとイエスが彼女たちに出会って、「おはよう」と言われた。」

ふたりのマリヤは日曜日の朝、日の出とともにイエスが納められている墓を目指しました。金曜日の夕方、十字架でいのちをお捨てになられたイエスのなきがらを男たちが取り下ろし、アリマタヤのヨセフが持っていた真新しい墓に納めたのをマリヤたちは見えています。ですからどの墓にイエスが納められたのか間違はずはありません。ところが墓に来てみると不思議なことが起きました。大きな地震とともに、墓をふさいでいた石がわきに転がされ、墓穴がぼっかりと口を開けています。その石の上には今まで見たこともないような輝きをした御使いがすわっています。そしてこう言うのです。「恐れてはいけません。あなたがたが十字架につけられたイエスを捜しているのを、私はしています。ここにはおられません。前から言っておられたように、よみがえられたからです。来て、納めてあった場所を見てご覧なさい。」

皆さんが、もしマリヤたちといっしょにこの場面に立ち会っていたならと想像してみてください。冷静でいられたでしょうか。そんなことはないでしょう。今までだれも経験したことのないことが目の前で起きています。

確かに、イエスは十字架におかかりになる前に何度も語ってはいました。この方がやがて苦しみを受けて死なれ、そしてよみがえること。でもそれを聞いたときはぴんと来ませんでした。なにか遠い国のお話のようにしか思えず、そのときは現実感がありませんでした。なので、今日の前で御使いが「よみがえられたからです」と言うのを聞いても頭が混乱したままです。

それでも尋常ではないことが起きていることだけはわかりました。とにかく、ふたりのマリヤは、弟子たちに知らせようと、いま来た道を引き返すことにします。そんなふたりの目の前に、よみがえられたイエスがお立ちになりました。そしてこう言いました。「おはよう。」

私が救われてから間もなかった頃ですが、この箇所を初めて読んだとき、なんとなく不自然な印象を持ったことを今でも覚えています。何か不自然かという、このあいさつです。8節に「彼女たちは、恐ろしくはあったが大喜びで」とあります。ふたりのマリヤは気が動転しています。異常な恐怖心と、なんだかとにかくうれしいことが起こっているらしいという相反する気持ちの中であわてふためいています。汗が噴き出し、心臓がばくばくと音を立てています。早く知らせなければと急ぐのですが、足がもつれて何度も転びかけます。そんなふたりに対して、イエスが「おはよう」と声をかける。なんだかあまりにも場違いで、間が抜けているとき感じます。ふたりの様子を見るなら、もっと別のことがふさわしく感じられます。

なぜ「おはよう」なのでしょう。イエスがお語りになったのであるなら、もっともこの場にふさわしいことばとして語ったはずで

す。どうしてふさわしいと言えるのか。「おはよう」の意味を考えます。

### 3 「おはよう」の意味

#### 1) あいさつ

みなさんも今朝教会の玄関に入られたとき、誰かに「おはよう」とあいさつしたと思います。顔を合わせたのに何もあいさつをしないなら、かなり気まずい思いをすることになります。考えみると日常のあいさつというのは不思議な働きをしています。「おはよう」ということばそのものに、何か特別な意味があるわけではありません。でも、人と人がうまくつきあっていくためには欠かせない働きをしています。

あいさつをするという習慣は、世界中どこへ行ってもあります。二千年前のイスラエルでも同じでした。彼らも顔を合わせれば、あいさつを交わします。この箇所では「おはよう」と訳していますが、「いかがですか」、「やあ、おげんきにしていますか」とか「お会いできてうれしいです」と何とでも訳すことができることばです。

イエスは、当時人々が使っていたごくありふれた日常のあいさつのことばをここで語りになります。では、イエスは単純に朝のあいさつをただけなのでしょう。

#### 2) 喜びなさい

聖書には無駄なことばは一つもありません。すべてに深い意味があります。このことばもそうです。あってもなくてもよいような、いつもの朝のあいさつをしたのではありません。イエスはもっと豊かなことを語ろうとしているのです。

その種明かしをします。日本語聖書で「お

はよう」と訳されていることば。もともとのことばを直訳すると「喜びなさい」という意味になります。「喜びなさい」がどうして「おはよう」なのかと、少し不思議に思われるかもしれません。

日本語で考えてみます。例えばお会いした相手と別れるとき、親しい間柄であれば「じゃ、またね」「またあした」と言います。「また今度お会いしましょう」「あしたお会いできるといいね」、ふたりが再会できるようにと願う言い方です。これからはばらく別れ別れになるけれど、その間お互い何事もなく無事に会えるように。お互いの無事と健康を祈ることばです。それがいつの間にかあいさつのことばになりました。それと同じように、もともと「よろこびなさい」であったのが習慣として「おはよう」の意味で使われるようになりました。

イエスはこのことをうまく利用しています。いつものあいさつの言葉「おはよう」を、本来の意味で語り直そうとしています。「喜んで下さい。」

#### 4 ともに喜んでください

(1) 父なる神が、御子を死からよみがえらせて下さったから

ちょっと考えてみると、私たちがほかの人に「喜んで下さい」と言うことは、あまり多くはないはずです。理由がふたつあります。一つ目。そもそもまず自分が喜んでいなければ、人に喜べとは言えません。二つ目。言われる側の身になれば、いきなり他人から「喜びなさい」と言われて喜べるものではありません。自分にも喜ぶ理由がないと喜べません。

そうしますと、イエスが「喜びなさい」と言われたのには二つの理由があったことに

なります。一つ目。この方がまず心の底から喜んでいるから。イエスはふたりのマリヤと一っしょに喜びたいのです。「わたしいまは喜びで一杯だ。ふたりのマリヤ。あなたがたも一っしょに喜んでくれないだろうか。いや、なぜわたしが喜んでいるのか、あなたがたが知れば、あなたがたもきつと一っしょに喜んでくれるはずだ。」そんな思いが込められています。なぜイエスは喜んでいるのでしょうか。この方が死からよみがえられたから。もちろんそうです。でもそれだけではまだ少し足りない。正しく言うならば、父なる神が御子イエスを死からよみがえらせて下さったから。皆さんは、このことをしっかりと理解してください。私はずっと間違っ覚えていたからです。イエス・キリストは、自分の力で死からよみがえったものではありません。主は、神のひとり子でありましたが、自分を死から救うという力さえも捨てられました。ただ最期まで捨てなかったのは、信仰でした。父なる神が必ずご自分を死からよみがえらせてくださる。そのことを信じ続けます。ヘブル書12章2節に「信仰の創始者であり、完成者であるイエス」ということばがあります。信仰とは何か。この方が身をもって私たちに示して下さいました。主の信仰に、父なる神が癒えて下さった。そのことを心から喜んでおられます。

(2) あなたがたもやがてそうなります

主がふたりのマリヤに「喜んで下さい」と語る二つ目の理由。

イエス・キリストは、私たちの先頭に立ち、信じ続ける者は必ず救いをいただける、その約束が真実であることを身をもって明らかにして下さいました。ならば、同じことが私

たちにも起こると言うことです。もう、ことばだけの約束ではないのです。イエスが示して下さいました。だから「喜ぼう」と声をかけて下さいます。

私たちの目の前を見るなら、心が暗くなるようなことばかりが起きます。ときには不安や恐怖が心をとらえて放しません。愛する者が病気で倒れます。愛する者が弱っていきます。自分の身体の弱さを覚えて悲しくなります。喜びなどどこにもないように感じられるときもあります。

しかし主はそんな私たちに今朝語って下さいます。「いっしょに喜ぼうではないか。あなたは、どんな境遇の中にあっても、喜ぶことができる。この喜びは絶対にだれにも取り去ることはできない。」

よみがえりの主を覚え、この方を見上げたいと願います。